


知多半島ケーブルネットワークコミュニティ誌 [ココナッツクラブ]

# COCONUTS CLUB

September 9  
2021

豊と  
一緒に暮らしたい





# 畳と一緒に暮らしたい

どれだけ住宅環境が変わっても、  
畳の上で過ごす時間の心地よさは変わらない。  
しかし存在が当たり前すぎるゆえ、  
畳について知らないことの方が多いのではないだろうか。  
今回は日本の暮らしに欠かすことのできない畳をクローズアップしてみた。

良い畳は、見た目、感触、匂いの三拍子が揃っている。



## 日本人と畳の長い付き合い

畳にもシーズンがある、ということをご存じだろうか。

畳の主材料であるイグサは初夏にぐんぐん育ち、産地では一面に広がる田んぼに青々としたイグサが波を打つ風景が見られる。七月に入ると成長がピークに達し、人の背丈ほどにまで成長したイグサの刈り取りが始まる。これで畳の表面部分の「畳表」を作るのだが、その年に収穫されたイグサを使った「新物」の畳表が市場に流通するのが秋だという。つまり、暑い盛りを過ぎるこれからのシーズンだ。

畳の心地よさは改めて書くまでもないだろう。湿度が高い夏には涼しさを、寒い冬にはぬくもりを体感させる畳は、日本の気候風土が育んだ用具である。和風建築が少なくなるにつれ需要も減ったと言われてきたが、日本の住まいから畳が絶えることはないだろう。機能性とデザイン性が重視される現代の新築住宅においても、一室だけ畳敷きの部屋が設けられることも

多い。座ってもいいし寝転がってもいい畳部屋は、赤ん坊から高齢者まで世代を問わず受け入れる懐の深さを持っている。

そのルーツは古代にまで遡る。植物を加工した座所という意味で、畳の祖先は藁を編んで作った敷物とされる。畳という言葉が登場する最も古い文献は奈良時代に編纂された古事記で、ここには海驢の皮を用いた「皮畳」、絹織布の「純畳」、植物の菅を原料とする「菅畳」が記されており、また、日本書紀や万葉集にも記述がある。古代の畳は敷物全般を意味し、薄手の敷物を折りたたみ重ねて使ったことが「たたみ」の語源と考えられている。

今のように厚みのある形状になったのは平安時代。貴族が座具や寝床として使い、身分によって畳の大きさや厚さも定められるようになってゆく。この時代には板床の上に一枚だけを置いて使われたが、武士が政治を司る鎌倉時代から室町時代には、武士の住まいで部屋一面に畳が敷き詰められるよう

になった。

庶民の住まいに畳が使われるようになるのは江戸時代に入ってから。長い年月をかけて普及・定着し、いつしか畳は日本の住まいに欠かせない存在となっていたのである。

## 床十表十縁II畳

畳の一般的なイメージは、平均的な大人一人が楽に寝転がれる大きさというところか。細かく言うとサイズには六種類あり、主に西日本で使用われてきた一九二cm×九五・五cmの「京間」、東日本で使われてきた一七六cm×八八cmの「江戸間」が主流。このほか、東海地方でよく使われてきた一八二cm×九二cmの「中京間」というものもある。厚さの基準はJIS規格の五五mmか六〇mmだが、フローリング用としてそれより薄いものも作られている。

構造は基本的に同じ。ひとつの畳は「畳床」「畳表」「畳縁」という三つの部材から成っている。

畳床は畳の芯といえる部分で、上に畳表を取り付けるので、普段

は目に見えない。しかし快適さの肝であり、適度な堅さと適度な柔らかさの両方を備えている。中に空気を含んでいるので程よい弾力性もたらされるのと同時に、断熱効果によって夏はひんやり感じられる。

もともと畳床は藁を材料としていたが、藁床は今や高級品で、一般家庭で使うことは滅多にないという。また、天然素材であるがゆえに、高気密化した現代の住宅で使用するカビが生えやすいという難点もある。現在の主流は「押出発泡ポリスチレン」と木質系素材のボードをサンドイッチ状にした畳床で、藁床以上に断熱・吸湿放湿・防音などに優れているうえ、軽いので扱いも楽だ。

畳表はいわば畳の顔。見た目と肌触りの決め手となり、高品質のものは匂いもいい。およそ四千本から七千本のイグサを使って織り上げたシート状のもので、畳床に縫い付けて使う。国産のイグサは熊本県が全国シェアのほぼ九割を占め、また畳表の主産地も熊本県だ。



凛とした畳とともにある暮らしは、爽やかであたたかだ。

畳縁は、補強のために畳の二辺に取り付けた細い帯状の織物である。装飾も兼ねており、シンプルな顔立ちの畳をきりりと引き締める。織物が盛んな岡山県倉敷市や福井県が中心的産地だ。



畳床



畳表

端正な畳ができるまで

このように、畳は材料ごとに産地やメーカーがあり、畳屋は一から畳を作るわけではない。これらの材料

を仕入れて一枚の畳に組み上げることが、畳屋の仕事だ。その工程を、美浜町河和の国道247号沿いに作業場を構える榊原畳店で見せてもらった。

新品の畳の製造工程は次のとおり。まず、畳床を「框縫い機」にセットし、畳床の短いほうの二辺(框)を裁断して敷く部屋のサイズに合わせる。続いて、畳床の上に畳表を載せ、機械にセットされた畳糸で框の両面に縫い付ける。そして、長い方の二辺はイグサの端の部分を採用して、これを切っていく。

それができたらもうひとつの機械に移す。これは畳縁を縫い付ける機械で、畳縁と「縁下紙」を一緒に縫い付けつつ、長辺を裁断する。畳縁だけを畳に着けると角が丸みを帯びてしまうのだが、縁下紙を下に重ねれば角がきちんと立つので、敷いたときに美しい。両側に畳縁を着ければ畳の完成だ。

昔はこれらの工程が全て手作業だったが、多大な手間と時間がかかり、今ではほとんどの畳が機械縫いだという。二つの機械ともミシンの

ような役目で、縫い着けは自動化されているが、留めたり裁断したりする部分では昔ながらの道具が使われている。機械を使うとは言え、わずかな寸法の狂いでもぴったりと敷き詰めることができないので、細部の調整には経験と技術を要する。そこはやはり職人の腕なのである。

薬床が主流だった時代の畳はとても重く、また、厚みのある畳床に畳表と畳縁を縫い付けるにも力が必要とした。ゆえに、畳屋はもっぱら男性の仕事場だったという。ところが榊原畳店の主は女性である。彼女の名前は榊原名津枝さん。一見、大きな畳を扱う職人とは思えない細腕の女性だが、作業場で工程を実演してもらったその無駄のない動きと眼差しは、まさしく職人のそれだ。機械化と軽量化によって昔に比べると女性でも参入しやすい業種にはなっているようだが、女性職人は畳業界ではまだまだ珍しい存在だという。

榊原畳店は昭和初期、榊原さんの祖父・金治郎が創業し、地元では

「畳金」の屋号で親しまれてきた。二代目は父の金宏さんで、榊原さんが家業を継いだのは今からおおよそ十五年前のこと。榊原さんはかつて銀行に勤務していたが、子供の頃から祖父や父の仕事を間近に見て育ってきたので畳への思い入れが強く、家業を自分の代で途絶えさせたくない、自ら後継者となる道を選んだ。

畳材料が可憐な和雑貨に

ただ、家業を継いだとき、畳に対する自分の思いと世間のイメージにギャップがあることに気が付いたという。簡単にいうと、今の時代もまだまだ住まいの中に畳が必要とされているのに、畳そのものの良し悪しがいまひとつ理解されていないということだった。「お客様がどのようなライフスタイルを好み、どういった畳を必要としているのか、会話してそれを引き出し、その住まいに最適な畳を提案したい」と思ったんです。お客様が主体的に選んだ畳ならば、きつと愛着を持って使っ



てもらえるでしょうから」と榎原さん。若い世代の中には、豊の部屋の使い方がわからないという人も珍しくないそうで、そんなときには豊部屋のインテリアを含めたアドバイスもしている。新築の家に和室を設えたならば、使い方を豊屋に相談してみるのも手だろう。

榎原さんは豊屋のほか、美浜町役場のすぐ近くに和雑貨の工房兼実店舗Mon Belleeeeを持っている。店内を覗くと、バッグ、ケース類、財布などカラフルで可愛い小物がずらりと並び、豊とは真逆の世界だ。普段着の榎原さんも、職人というよりこちらの雰囲気に近い。しかし、これらはすべてイグサや豊縁を使って作られたもの。豊とは不可分の工房なのである。

店内の一角には、ロール状になった色とりどりの豊縁が並べられている。その数はおよそ四百点で、豊縁にこれほどのデザインがあるのかと驚くばかりだ。和室のワンポイントとして使うのもいいが、和雑貨に取り入れると確かに映える。数々のアイテムは、職人としての知識・

技術と、クリエイティブな感性を兼ね備えているからこそ生み出されるのだろう。

制作のきっかけは十年ほど前、子供のために手作りしたペンケースだったという。「それまで雑貨を作ったことはなかったんですが、子供に好きな豊縁を選ばせて作ってみた後、祭礼の太鼓用のバチ袋を作ったところ近所の人の目に留まり、それからはリクエストに応じて種類がどんどん増えマルシェイベントにも出展するようになりました」。

使いやすいさとデザイン性の高さが次第に評判を呼び、三年前にはMon Belleeeeを設立した。「屋号には、いろいろな意味で良いご縁があるようにとの願いを込めています。和雑貨から縁が広がり、もっと多くの人に豊の素晴らしさを知ってもらえたら嬉しいですな」。そう話す榎原さんからは、豊への深い愛が伝わってきた。

〈取材協力〉榎原名津枝さん(Mon Belleeee 榎原豊店)  
〈参考文献〉日本人とすまいの豊リビングデザインセンター  
OZONE制作 光琳社出版 / イグサのすべて 森田洋新書出版 /  
総合豊型録 たたみ専科 たたみ新聞社